

世界でただ一つの本

大木 康
東京大学東洋文化研究所 助教授

フローベールの小説「愛書狂」（生田耕作編訳『愛書狂』白水社 1995）で、愛書家のジャコモは、スペインにただ一冊しかないギリシャ語注釈つきのラテン語の『聖書』を奪う目的で、書籍商パティストの店に放火したとの濡れ衣を着せられる。その裁判にあたって弁護人は、この『聖書』が唯一のものでないことを証明するために、その別本を披露する。だがジャコモは、スペインで一冊きりと思っていたものが目の前に現れたことに深く絶望し、自ら死刑を望む。最後、その本を手に取ったジャコモは、いきなりそれを破り裂いてしまう。

「弁護士さん、あんたは嘘つきだ！ ほら私が言ったとおりだ、あの本はスペインに一冊しかないんだ！」

中国の古籍にあっても、愛書家の目の色を変えさせるような言葉本来の意味での孤本はもちろんある。しかし中国の書物の場合、同じ年に同じ所で刻されたはずの同じタイトルの書物でありながら、いざその実物を手にとって見ると、必ずやどこかが違っているものである。ここでは筆者のささやかな経験から、そのいくつかの例を紹介し、責めをふさがせていただくことにしたい。

若くして亡くなった愛妾董小宛の思い出をつづった、明末清初の文人冒襄の回想録『影梅庵憶語』の翻訳、注釈作りに没頭していた時のこと。冒襄の事跡をあとづけるために、冒襄が師友たちから贈られた詩文を集めた『同人集』を見る必要が出てきた。ところがこの『同人集』、東大、京大、内閣文庫、東洋文庫など、筆者が日常的に利用させていただいている図書館には所蔵されていなかった。

たまたま在外研究で中国に行く機会があり、93年4月、上海師範大学の図書館で、はじめて念願の冒襄『同人集』とめぐり合い、その必要部分を筆写することができた。同じ年の5月、今度は香港大学図書館で再びこの『同人集』にめぐりあえた。ここではどっさりコピーを取ることもできた。

同じ5月、北京、琉璃廠の古書肆で本を眺めていた私は、あやうく卒倒しそうになった。目の前に積まれている古書の山の中に冒襄『同人集』があるではないか！ さっそくこの『同人集』を買い求めたのであった。思いこがれていた本にめぐりあえたばかりでなく、自分自身がその所蔵者になってしまった！ 至福の瞬間であった。

日本に帰ってきて、さらに調べてみると、これははなはだ粗忽だったのだが、『同人集』は日本国内でも、東北大学図書館、早稲田大学図書館に所蔵されていた。青木正児「水絵園の修禊」（『全集』巻7）に『同人集』を引用していたのだから、これは当然調べてみるべきすじであった。その後も、ハーバード・エンチントン図書館に一本が蔵されていたのを見たし、近年では『四庫全書存目叢書』の中にも『同人集』が影印されている。

筆者は、都合七種類の『同人集』を手にとって見たことになるが、結論としていえば、刊刻の段階ですでに必ずどこかに違いがあって、全く同一といえるものはついに一つもなかったのである。

各版本間の異同を知るための目印の一つになるのが、乾隆帝から批判を受け、当時としてはかなり徹底した禁書の措置がとられた錢謙益に関する記述の有無である。冒襄が南京秦淮の妓女であった董小宛を落籍しようとして手間取っていたとき、それを助けたのが錢謙益であった。冒襄が錢謙益から贈られた詩文も少なくない。『四庫全書存目叢書』に影印する康熙14年序刊本『同人集』では、錢謙益の文章が認められているのに対して、乾隆以後の版本では錢謙益の名前、あるいはその作品自体がきれいさっぱり消されているのである（もっとも存目叢書本でも、

なぜか巻5においては錢謙益の名前があるべきところが空白になっており、この本も乾隆以後の刊行にかかる可能性を残している)。

というわけだから、厳密にいうなら、筆者の手に入れた『同人集』は、管見に及んだ限り世界にただ一つしかないことになる(あれこれ綴ってきたが、結局いたかったのはこの点である)。

以前別の論文(拙稿「黄牡丹詩会－明末清初江南文人点描」『東方学』第99輯 2000)にも記したことなのだが、錢謙益の禁書に関して、なかなか面白い材料にめぐりあったことがある。乾隆41年序を付す杭世駿『道古堂集』巻8所収の「影園瑤華集序」に、

一時碩彦咸就玩賞、有詩百餘章、職方悉糊名易書、送虞山錢蒙叟、評定甲乙、南海黎美周實為之冠。(当時のすぐれた人々がみな〔黄牡丹〕を鑑賞し、百余首もの詩が作られた。職方〔鄭元勲〕はその作者の名前を隠し、清書し直して、虞山の錢蒙叟〔錢謙益〕のもとに送り、優劣の評価をしてもらった。かくして南海〔廣東〕の黎美周〔黎遂球〕がトップになった)

と記されている部分が、同じ『道古堂集』の乾隆57年刊本では、

一時碩彦咸就玩賞、有詩百餘章、南海黎美周實為之冠。(当時のすぐれた人々がみな〔黄牡丹〕を)鑑賞し、百余首もの詩が作られた。南海〔廣東〕の黎美周がトップになった)

となっており、「職方悉糊名易書、送虞山錢蒙叟、評定甲乙」の錢謙益に関わる部分がすっかり削除されていたのである。筆者などは、何かある書物を見たいと思った時、たまたま自分の大学に一本が蔵されていることがわかれば、それを見てすませていることが多い。しかし、同じ書物であっても、手許に

あって見ているものが、この『道古堂集』の後者のように、何らか不完全な版本でない保証はない。なかなかおそろしい。

同じようなことをごく最近また経験させられた。これも錢謙益の愛妾であった柳如是について調べている関係から、清代の女性詩人吳瓊仙の詩集『写韻樓詩集』を見る必要があった。この『写韻樓詩集』はどうやら日本ではなく、『清人別集總目』(安徽教育出版社 2000)によって、中国には上海の復旦大学ほかいくつかの図書館に所蔵されていることがわかった。

そこで、復旦大学の知人と連絡を取って、『写韻樓詩集』を見に行くことにした。ところが出発する数日前のこと、清の袁枚(隨園)の女弟子について研究を続けておられる九州大学大学院生、蕭燕婉さんから、なんと『写韻樓詩集』のコピーがどさりと送られてきたのである。蕭さんは、広州・中山大学の先生と連絡を取り、中山大学本のコピー入手され、それを筆者に送ってくださったのであった。躍り上がって喜んだものの、この『写韻樓詩集』に関しては、上海に行く必要がなくなってしまったことになる(もちろん、見たかったのはこれ一種だけではありませんでした)。しかし、それでもいちおう復旦に行って、『写韻樓詩集』を手に取ってみた。蕭さんから送っていただいたコピーも持ってゆき、照らし合わせて見たが、どうやら同じ版本のようであった。ところが、である。復旦本には、中山大学本に無い跋二篇がついていたのである。それには、女性詩人吳瓊仙の詩を読んで感激した何明生(女性)がその夫の助力を得て、この詩集を刊行した経緯が記されていた。この跋文によって、女性詩人の詩集刊行にまつわる女性たちの関わりがさらに明らかになった。これは復旦本を見なかつたらわからなかつことなのであった。

同じ本が存在しないがゆえに、世界中本を見て歩く楽しみが保証されているわけだ。

古代チベットの王家の谷で —撮影現場レポート&その後—

星 泉

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助手

2002年3月、まだ寒さの残るチベットを訪れた。研究所の同僚であるT氏、S氏と、かつての同僚N氏、そして私の四人組である。私を除いた三人にとっては初めてのチベット行きである。それぞれ専門は異なるが、T氏とN氏は宗教学という立場から、S氏と私はチベット・ビルマ諸語の言語学という立場から、チベットとは関わりをもってきた。そして現在は、文字情報学という新しい学問分野に立ち向かおうとしている同志でもある。

そんな私たちの旅の目的の一つは、古代チベット文字の調査である。チベット文字は7世紀に確立したと言われているが、実際に碑文のような形で残っているのは、古くて8世紀のものである。今回は、8世紀から9世紀ごろの石碑に刻まれた文字を実際に目で見て現状を調査し、碑文に刻まれた文字を可能な限り撮影してこようというものであった。

今回は、チベット自治区のロカ地方（山南地区、ラサの東南方向）にある金石碑文を中心に調査したが、ここでは特に古代チベットの王ティデソンツェンの墓碑の調査について、簡単にご報告したい。

ロカ地区の中心地ツエタンからずっと南に下っていくとチョンギエーの町に着く。さらに奥に進んでいくと、古代チベットの王家の谷、チベット王陵区が現れる。そこは、赤茶けた荒涼としたゆるやかな谷であった。点在する王墓を感慨ふけりながら眺めた後、王陵の堂守とおぼしき僧侶に案内をお願いした。単なる旅行者でしかないわれわれは、誰に連れていってもらえるわけでもなく、地元の人の情報が頼りだ。出発前に見ていた写真から、野ざらしの石碑が現れることを予想していたのだが、周囲は壁で取り囲まれ、門も屋根もある。これでは外から見ても石碑が入っているかどうかわからないわけである。僧侶が鍵を開けると、下に降りるための急な階段、地表からは深さ4、5メートルほどもある四角い大きな穴が姿を現した。そして目の前に現れた墓碑は、7メートルはゆうに超える高さのものであった。

この墓碑は、実は1984年にチベットの発掘調査隊によって発掘されるまでは、半分以上が土砂に埋もれていた。墓碑が

建てられたのは815年ごろというから、千年以上にわたって土砂が堆積していったわけである。文字の刻まれた石碑の表面はかなり削り取られ、われわれの目で見ても、確かにひどい状態であった。前日に撮影したサムイエ寺の石碑よりも少し新しくらいのほぼ同時代の石碑だが、あまりに様子が違う。どんなに肉眼で迫ってもどんなに手でなぞっても読みとれず、巨大な石碑を見上げて一同しばし呆然、ため息をつくばかりだった。

実際、この石碑には苦労話がたくさんある。外国人としてはじめて実地調査をしたのはイタリアのチベット学者トゥッチである。1948年のことだったが、その時点では、文字の書かれた面はすでにぼろぼろで、読みとりがたいへん難しい状態だったという。翌1949年に調査に訪れたイギリスのチベット学者リチャードソンの記録によると、石碑の下部は地中に埋まっており、はじめは21行しか読むことができなかった。彼はまずそれを書き写し、撮影を済ませた後、同行者とともに石碑の回りを掘り進めた。そしてやっとのことであらざる25行分を発見するに至るのであるが、そこはまさに摩滅がはげしく読みとりが難しい箇所。しかも薄暗く狭い溝の中で書き写すのは困難を極めた。そんな中でも彼は撮影をすすめ、こつこつとメモを取ったのであろう。苦労が偲ばれる。

その後1960年のこと、まるでその執念が天に通じたかのように、リチャードソンはシッキムのある学者から、18世紀のチベットの高僧が収集した石碑の写本集を手渡される。写本の注釈には、この墓碑は、上から29行には文字が刻まれているが、その下14行ははっきりと読みとれず、さらにその下は地中に埋まっており、いくら進んでも文字は書かれていない、と書かれていた。どうやら18世紀の時点ではまだ石碑の大部分が地上に姿を現していたらしい。そんなわけで、苦労したリチャードソンは、この写本と自らの調査ノートをつきあわせ、1969年に校訂テキストと翻訳を発表することができたのである。

ティデソンツェン王の功績を讃えるこの石碑には、王のもとでチベットが安定し、豊かになり、人々が幸福に暮らすことができたとあり、また別の箇所には、王が即位してすぐに唐との間で戦争が起こり、軍勢を送ったこと、その後も領土をめぐってたびたび争い、そのことで条約を結んだ、といったような生々しいできごとも記されている。ティデソンツェン王は9世紀初めに短い期間（799？-815）在位した王で、ちょうどその時期は、チベット帝国が唐の弱体化に乗じてさらに版図を拡大し、広大な版図の占領地を持つ強大な軍事帝国として君臨していたころにあたり、そうした状況をよくあらわしている。

後には、中国の学者も調査を行い、1982年には王堯がこの石碑の読みと翻訳を発表している。そして1984年9月、チベット自治区の発掘隊が入り、ついに石碑の全貌が明らかにな

った。地中に埋まっていた部分から新たに12行の存在が確認されたのである。この発掘の記録は中国の雑誌『文物』(1985, 9号)で読むことができる。写真と図のほか、12行のテキストと翻訳も掲載されている。全59行となった碑文は、その後、李方桂らによって校訂され、翻訳が試みられている。

さて、他人の苦労話が長くなつたが、われわれの調査が実際どのようなものであったか、少しご報告したい。

くだんの僧侶に導かれ、階段を下まで降りてみると、巨大な石碑は大きな石の龜の上に載ってわれわれを待っていた。碑文の刻まれた面に顔を近づけて見てみると、かすかに読めるという程度である。しかも人の手の届くところはなんと、バターと麦焦がしにまみれている。サムイエ寺の石碑もそうであったが、おそらく墓碑にお参りをした巡礼者たちが、ありがたい王様の石碑に敬意を込めてバターをなすりつけ、麦焦がしをふりかけていったものであろう。バターだけならまだましたが、麦焦がしと一緒にくたになって固くこびりついてしまったものはいくら布で拭ってみても落ちない。熱湯でもかけて一気にこそげ落としたい気分だったが、さすがにそういうわけにはいかなかつた。

さらに上を見上げると、発掘前に地表に出ていた部分だと思われるが、碑文の上から大小の辻(ボン教のいわゆる左辻)がいくつも刻みつけられている。いつのものかは分からないが、もしボン教徒が墓碑を傷つけたのだとすると、仏教を重んじた王に対するボン教徒の復讐のように見えてこないでもない。崇仏派の父王ティソンデツエンが、対抗する勢力であったボン教徒たちをしりぞけて仏教を国教化したという歴史が思い出されて興味深い。ちなみに先ほどサムイエ寺は、仏教が国教と定められたときに建立された寺である。

気を取り直して撮影を開始。使うカメラはニコンのD1X、高性能デジタルカメラである。こことろいくつもの碑文を撮影しているS氏はその経験を生かし、様々な工夫を凝らして撮影に挑んだ。その結果、碑文の23行目から最下段の59行目まではかなり実物と近い状態で撮影することができた。高解像度で撮影されたデータは、短い調査期間しか許されていなかったわれわれには、帰国してからの利用に十分役に立つものとなつた。

残念ながら、帰国してから今に至るまでデータを十分に利用しているとはとても言えないが、リチャードソンや王堯、李方桂らによる研究成果と照らし合わせながら撮影データを眺めてみると、ほんのちらほらではあるが、これまでの読みを訂正できる箇所があることに気づいた。例えば、43行目の末尾に、"tshun cad |xxx| hor kha ga(n)"という一節があるが、リチャードソンは|xxx|の部分を"stod"「上」と読み、王堯と李方桂は"lho"「南」と讀んでいる。しかしデジタル画像に写ったデータを見ると、極めてはっきりと"ho yo"と刻まれているのである。他にも、45行目の末尾から46行目の冒頭

にかけては、王堯が"nyi 'og tu ---"「日の下に---」という読みを提示しているが、デジタル画像で確かめると、"bka 'og tu chud par"「支配下に入る」と読める(「」内は筆者の訳)。43行目に関しては、"ho yo hor kha g?"と読めたからといって、これが何を意味するのか分からないのでどうしようもないが、チベットが周辺諸国と領土争いをし、占領して支配下においたことなどが書かれている箇所のようもあるので、そうするとチベット語ではない言語の地名または人名なのかもしれない。

古代史の研究者でもない私ができるのはせいぜいこれくらいのことしかないし、調査そのものも、準備不足、勉強不足が重なって、たいへん不十分なものではあった。しかし帰国してからデータを整理して感じたことは、高機能のデジタルカメラによる撮影などの新しい手法を使うことで、まだまだ新しい発見が出る可能性があるということである。また、こうしたデジタルデータを利用して、碑文や古文書に使われた文字の字体、字形をデータベース化していくような作業が是非とも必要であると痛感した。まだまだ間の中を手探りしているような状態ではあるが、今後、文字情報学という観点から、チベット文字の画像データベース化に少しでも寄与できたらと決意を新たにした次第である。

調査風景



入り口



亀の形の台座



(高島淳氏撮影)